

チャ

1 カンザワハダニ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い
丹波 平年並
丹後 平年並

予報の根拠

(1) 10月中旬現在、発生量は山城でやや多く(+)、丹波、丹後で発生を認めていない(丹波で平年比やや少)(-)、(丹後で平年並)。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生葉率(%)	1.3	0.6
	寄生虫数(頭/100葉)	3.3	1.5
	発生ほ場率(%)	50.0	10.5
丹波	寄生葉率(%)	0.0	0.6
	寄生虫数(頭/100葉)	0.0	1.5
	発生ほ場率(%)	0.0	21.7
丹後	寄生葉率(%)	0.0	0.7
	寄生虫数(頭/100葉)	0.0	2.6
	発生ほ場率(%)	0.0	20.0

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は日本海側ではほぼ平年並、太平洋側では平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温が低下するとすそ葉に移動して越冬し、翌春の発生源となる。
- (2) 翌春の一番茶期の発生を抑えるには、越冬前の防除が有効である。越冬前の防除が十分でないと、翌春の一番茶期間近くに発生が多くなり、防除に苦慮する場合がありますので、越冬前防除の徹底を心掛け、遅くとも11月末までに終えるようにする。

2 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年並
丹波 平年並
丹後 平年並

予報の根拠

(1) 10月中旬現在、発生量は山城で平年比やや少なく(-)、丹波で平年並、丹後で発生を認めず(平年並)。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生芽率(%)	4.7	7.3
	巻葉数(枚/m ²)	1.6	6.3
	発生ほ場率(%)	33.3	41.0
丹波	寄生芽率(%)	5.3	8.8
	巻葉数(枚/m ²)	0.0	2.0
	発生ほ場率(%)	100.0	56.7
丹後	寄生芽率(%)	-	5.3
	巻葉数(枚/m ²)	0.0	2.2
	発生ほ場率(%)	0.0	47.5

(2) フェロモントラップへの誘殺数は宇治市で平年並、綾部市で平年比やや少なく、京丹後市で例年比やや少ない。

場所	項目	本年	平年値(例年値)
宇治市	誘殺数(頭)	430.0	797.7
綾部市	誘殺数(頭)	58.1	647.4
京丹後市	誘殺数(頭)	79.0	325.5

* 誘殺数(頭):9月第4半旬~10月第3半旬の合計値

(3) 宇治市のフェロモントラップへの誘殺数が、10月以降増加傾向にある(+)。

場所	月・半旬	本年	平年値
宇治市	9・4	15.8	192.3
	5	32.2	217.1
	6	49.0	200.3
	10・1	103.0	98.0
	2	106.6	54.7
	3	123.4	35.3

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、年5回世代を繰り返し、蛹で越冬する。
- (2) 特に自然仕立て園では園をよく見回り、発生を認めたら直ちに防除し越冬密度を下げるようにする。

※今後注意すべきその他の病害虫等はp8を参照

野菜

1 アブラナ科野菜 ペと病

予報内容 発生量：平年比やや少ない(前年比やや少ない)

予報の根拠

- (1) 10月中旬現在の発生量は、キャベツで発生を認めず(平年並)、カブで平年比少ない(-)。

作物	項目	本年	平年値
キャベツ	発病株率(%)	0.0	0.0
カブ	発病株率(%)	6.7	34.3

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(-)、降水量は日本海側ではほぼ平年並、太平洋側では平年並または多い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) キャベツをはじめ、ハクサイ、ダイコンなどの各種アブラナ科野菜で発生し、アブラナ科野菜を連作した場合に発生が多くなる。
- (2) 気温が低く降雨が続く秋から初冬及び春先に発生が多い。
- (3) 肥切れすると発生しやすいので、肥培管理に注意する。

2 アブラナ科野菜 白さび病

予報内容 発生量：平年並(前年比やや少ない)

予報の根拠

- (1) 10月中旬現在の発生量は、ダイコンでやや多く(+)、カブで発生を認めていない(平年並)。

作物	項目	本年	平年値
ダイコン	発病株率(%)	0.7	0.2
カブ	発病株率(%)	0.0	0.6

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(-)、降水量は日本海側ではほぼ平年並、太平洋側では平年並または多い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 10月～11月の降雨が連続する時期に発生が多い。
- (2) 窒素肥料の過多を避け、水はけを良くする。
- (3) 過繁茂にならないよう適切な播種量を心掛け、間引きを徹底する。

3 アブラナ科野菜 白斑病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

(1) 10月中旬現在の発生量は、カブでやや多い（+）。

作物	項目	本年	平年値
カ ブ	発病株率(%)	1.3	4.2
	発生ほ場率(%)	16.7	6.0

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く（-）、降水量は日本海側ではほぼ平年並、太平洋側では平年並または多い（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨の多い年は、初秋から晩秋にかけて発生が多い。
- (2) 強風雨や泥のはね上げは、本病の伝染、まん延を助長する。
- (3) 肥切れすると発病を助長するので、追肥を早めに行う。
- (4) 多湿条件で発生しやすいので、ほ場の排水を良好にする。

4 キャベツ 菌核病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 本年4月に発生を認めていない（平年並）。

(2) 10月中旬現在、調査株で発生を認めていない（平年並）が、調査外では発生を認めている。

項目	本年	平年値
発病株率(%)	0.0	0.0

(3) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は日本海側ではほぼ平年並、太平洋側では平年並または多い（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発病適温は20℃前後で、曇雨天が続いた時に発生しやすくなる。
- (2) 発生終期に菌核が形成され土中に落ち、次の伝染源となる。菌核は土壤中で2～3年間生存する。
- (3) 発病株は菌核を形成するまでに抜き取り、処分する。

5 キャベツ 黒腐病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

(1) 10月中旬現在の発生量は、平年比やや多い（+）。

項目	本年	平年値
発病株率(%)	6.0	2.9

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は日本海側ではほぼ平年並、太平洋側では平年並または多い（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 害虫の食痕や風雨による傷口等は細菌の侵入を容易にし、本病の発生を助長する。
- (2) 降雨日数と発生量との相関が高い。
- (3) 台風等による強い降雨の後や害虫の被害が目立つ場合は、早期防除に努める。

6 アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 10月中旬現在の発生量は、キャベツで平年並、ダイコンおよびカブで発生を認めていない（平年並）。

作物	項目	本年	平年値
キャベツ	幼虫・蛹数(頭/10株)	0.1	0.1
	寄生株率(%)	0.7	1.1
ダイコン	幼虫・蛹数(頭/10株)	0.0	0.1
	寄生株率(%)	0.0	0.4
カブ	幼虫・蛹数(頭/10株)	0.0	0.1
	寄生株率(%)	0.0	1.0

(2) 10月第2半旬現在の予察灯(60W)への誘殺数は、京田辺市で誘殺を認めず（平年並）、亀岡市及び京丹後市では平年並。

場所	項目	本年	平年値
京田辺市	誘殺数(頭)	0	0.1
亀岡市	誘殺数(頭)	1	1.3
京丹後市	誘殺数(頭)	1	3.8

※ 誘殺数(頭)は9月第3半旬～10月第2半旬の合計値

(3) 10月第2半旬現在のフェロモントラップへの誘殺数は、京田辺市で誘殺を認めず（例年並）、亀岡市および京丹後市で平年並。

場所	項目	本年	平年値(例年値)
京田辺市	誘殺数(頭)	0.0	(0.6)
亀岡市	誘殺数(頭)	4.0	5.3
京丹後市	誘殺数(頭)	1.0	3.8

※ 誘殺数(頭)は9月第3半旬～10月第2半旬の合計値

(4) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は日本海側ではほぼ平年並、太平洋側では平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間の発生回数が多く、各発育段階(卵、幼虫、蛹、成虫)が混在する。
- (2) 雨が多いと発生が抑制される傾向がある。
- (3) 雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
- (4) 被覆資材などを利用し、物理的防除に努める。

7 ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 10月中旬現在の発生量は、小株で平年並、大株で例年比少ない(-)。

株の種類	項目	本年	平年値(例年値)
小株	被害株率(%)	18.4	31.5
	被害度	4.6	8.1
大株	被害株率(%)	17.7	(50.8)
	被害度	4.4	(25.4)

※小株:葉長40cm未満、大株:葉長40cm以上。

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は日本海側ではほぼ平年並、太平洋側では平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) 本種はアイリス黄斑ウイルス(Iris yellow spot virus: IYSV)による病害でネギえそ条斑病を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、赤色系防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 本種は、殺虫剤感受性低下が懸念されている。殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤を散布する。また、感受性の低下を避けるため、系統の異なる殺虫剤をローテーション散布する。
- (6) 新系統(産雄性生殖系統)と在来系統の殺虫剤感受性は異なるので、新系統の発生を確認している地域(山城及び南丹地域)では注意する。

詳細は平成29年3月27日付「防除所ニュース平成29年第3、4号」参照。

http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news3go_iysv_negiazamiuna.pdf

http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news4go_negiazamiunakeitou_hoka.pdf

8 ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年比やや少ない(前年比やや少ない)

予報の根拠

(1) 10月中旬現在の発生量は、小株および大株で平年比(例年比)少ない(-)。

株の種類	項目	本年	平年値(例年値)
小株	被害株率(%)	6.4	55.5
	被害度	1.6	14.1
大株	被害株率(%)	8.6	(48.5)
	被害度	2.1	(13.4)

※小株:葉長40cm未満、大株:葉長40cm以上。

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は日本海側ではほぼ平年並、太平洋側では平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 産卵から羽化までの発育所要日数は20℃で約36日、25℃で約23日程度である。
- (3) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。

(4) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害する従来系統とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させる別系統の発生を確認しているので注意する。

詳細は平成31年3月13日付け「発生予察特殊報第1号」を参照。

http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu201803_1.pdf

9 野菜類 シロイチモジヨトウ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

(1) 10月中旬現在の発生量は、ネギの小株でやや多く（+）、大株で発生を認めている。

株の種類	項目	本年	平年値
小株	幼虫数(頭/株)	0.03	0.01
	寄生株率(%)	2.4	1.3
	発生ほ場率(%)	20.0	5.3
大株	幼虫数(頭/株)	0.11	—
	寄生株率(%)	9.1	—
	発生ほ場率(%)	85.7	—

※小株：葉長40cm未満、大株：葉長40cm以上。

(2) 10月第2半旬現在、京田辺市のフェロモントラップへの誘殺数は平均比多い（+）。

場所	項目	本年	平均値
京田辺市	誘殺数(頭)	77.6	33.9
亀岡市	誘殺数(頭)	3.4	—
京丹後市	誘殺数(頭)	269.0	—

※誘殺数(頭)は9月第3半旬～10月第2半旬の合計値

平均値：京田辺市は平成20～26、平成29～令和元年の平均値(平成27、28年は欠測)

(3) カブおよびハウレンソウで発生を認めている（+）。

(4) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は日本海側ではほぼ平年並、太平洋側では平年並または多い（-）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 本種は齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、ほ場をこまめに観察して早期発見に努め、若齢期の防除を徹底する。

(2) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。

(3) 本種は寄主範囲が広く、ネギ以外に豆類、野菜類、花き類を加害するので注意する。

詳細は令和元年8月26日付け「病虫害発生予察注意報第6号」参照

<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/rlchuui6.pdf>

※今後注意すべきその他の病虫害等は p 8 を参照

今後注意すべきその他の病害虫等

チャ

1 チャトゲコナジラミ

10月中旬現在、京都府全域で発生を認めている。

本種の農薬による防除は、冬期（1～2月）のマシン油乳剤の2回散布が有効である。ただし、赤焼病の発病を助長する。そのため、マシン油乳剤を散布する3日から7日前に銅水和剤を事前に散布すると、これを予防できる。

野菜

1 トマト黄化葉巻病

トマト黄化葉巻ウイルス（Tomato yellow leaf curl virus:TYLCV）の感染により引き起こされる病気であり、タバココナジラミ類によって媒介され、本年は生産現場で本病の発生を認めている。

トマト黄化葉巻病の発生・拡大を防ぐためには、発生初期の発病株の抜き取りとタバココナジラミ類の防除を速やかに行い、「トマト黄化葉巻ウイルスの伝染環を絶つ」ことが重要である。

（1）黄色粘着板などを利用し、コナジラミの発生状況に注意する。

（2）先端部の葉が内側に巻いているもの、葉縁が黄化しているもの、株が萎縮しているものを認めた場合、関係機関と相談の上、発病が疑わしい株は速やかに土壌に埋める等、適正に処分する。

2 タバココナジラミ類

10月中旬現在の発生量は、施設キュウリや露地ナスで平年比多い。

タバココナジラミ類は世界中に分布し、多くのバイオタイプ（形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統）が存在する。本州では在来系統（バイオタイプJpL等）、バイオタイプB、バイオタイプQが確認されている。

バイオタイプQは薬剤感受性が低く難防除害虫であるので、以下の3点を防除対策の基本事項として、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

◎施設内にコナジラミを「入れない」。

- （1）開口部の防虫ネット被覆。
- （2）黄色粘着ロールの展張。
- （3）近紫外線カットフィルムの使用。

◎施設内・施設周辺のコナジラミを「増やさない」。

- （1）発生初期の防除の徹底。
- （2）薬剤のローテーション防除の実施。
- （3）天敵や微生物農薬の有効利用。

◎施設内からコナジラミを施設外に「出さない」。

- （1）開口部の防虫ネット被覆。

3 ネギべと病

本年（令和2年）は、3月中旬から発生を認めている。平均気温が15～20℃で降雨が多くなると、ほ場にすき込まれた罹病残さ等に潜伏している病原菌の活動が再び活発となるので、本病の発生には十分注意する。

4 軟腐病（キャベツ、ハクサイ、ダイコン、カブなど）

向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は日本海側ではほぼ平年並、太平洋側では平年並または多く（＋）、日照時間は日本海側では平年並または低く、太平洋側では平年比少ないと予想されているが、台風等の風雨による傷や泥のはね上げにより発病が助長されるとともに、キスジノミハムシ、コオロギ等食葉性害虫の食害痕からも細菌が侵入して発病することが多いので、強い降雨の後や害虫の被害が目立つ場合は、早期防除に努める。

ほ場の排水に努め、雨水が停滞しないようにする。施肥は、窒素過多にならないよう注意する。

参 考

I 近畿地方1か月予報

(10月17日から11月16日までの天候見通し)

令和2年10月15日

大阪管区气象台発表

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ない見込みです。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、近畿太平洋側で平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、近畿日本海側で平年並または少ない確率ともに40%、近畿太平洋側で少ない確率50%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目、高い確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	20	30	50
降水量(近畿日本海側)	30	30	40
降水量(近畿太平洋側)	20	40	40
日照時間(近畿日本海側)	40	40	20
日照時間(近畿太平洋側)	50	30	20

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は日本海側ではほぼ平年並、太平洋側では平年並または多く、日照時間は日本海側では平年並または低く、太平洋側では平年比少ないと予想されている」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

第1半旬 第2半旬 第3半旬 第4半旬 第5半旬 第6半旬
各月の 1～5日 6～10日 11～15日 16～20日 21～25日 26～最終日

2 発生量――病虫害の発生程度と広がり的一面を加味したものをいう。

3 平年値――原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

「予報本文」の見方をチャノコカクモンハマキを例に示します。

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
丹波 平年並（前年並）
丹後 例年並（前年並）

- ・「予報内容」は、今後の病虫害発生状況や発生時期の予測を平年比で示しています。
- ・平年比の見方は、「Ⅱ 用語の定義、4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較です。
- ・必要に応じて地域別に示します。

予報の根拠

- （1）前年10月の発生量は、山城、丹波、丹後で平年並の発生。
- （2）4月中旬現在、山城で平年比多く（+）、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。

地域	項目	4月の調査結果	4月 平年値
山城	綴葉数(/㎡)	3.0	0.1
	幼虫数(/㎡)	0.5	0.0
	発生ほ場率(%)	22.7	3.7
丹波	綴葉数(/㎡)	0.0	0.5
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	11.7
丹後	綴葉数(/㎡)	0.0	0.0
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

- ・「予報の根拠」として直近の巡回調査のデータの中で主だったものを示しています。平年値も記載しているので、防除等の目安としてください。

- （3）4月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平年比少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
- （2）通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
- （3）ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップや予察灯への誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の予測の根拠となった事項を記載しています。
- ・文中の（-）、（+）は、予測される発生量に影響を及ぼすと考えられるもので、（-）の場合発生が少なくなると考えられる要因、（+）は発生量が多くなると考えられる要因を示しています。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病虫害の生態、薬剤防除や耕種的防除方法の留意事項、要防除水準等を示しています。

IV 短期暴露評価の実施に伴う農薬の変更登録について

農薬の登録にあたっては、これまで、残留農薬の摂取量について、一日摂取許容量(A DI)を超えなければ食品安全上問題ないものと判断されてきましたが、今般、急性参照用量(ARfD)を超えないかという点についても評価されること(短期暴露評価)となりました。

今後、現在登録を受けている農薬について、順次、急性参照用量が設定されるとともに、短期暴露評価が実施されることとなります。

この結果、登録内容が変更される場合、変更登録が申請された段階で、農薬メーカーから変更登録の内容(商品名、変更事項等)が発表されます。これらの農薬は変更登録の前であっても、変更後の使用方法に基づいて使用するようになります。

(ご注意)

本内容は、国(農林水産省等)や農薬メーカーからの情報を府民の皆さまにお伝えするために掲載しています。したがって、掲載するまでに時間がかかることがあります。

1 最新の使用基準を確認して使用していただきたい農薬

※ラベルどおりに使用すると問題となることがあるため、最新の使用基準を各農薬メーカーのホームページ等で確認してください。

有効成分 (変更年月日)	主な商品名	変更内容※
アセフェート (平成26年11月17日)	オルトラン水和剤、オルトラン粒剤、オルトランDX粒剤、 ジェイエース水溶剤、ジェイエース粒剤、 スミフェート水溶剤、スミフェート粒剤、 ジェネレート水溶剤、ジェネレート粒剤	適用作物削除 適用時期変更 適用回数変更 希釈倍率変更
カルボスルファン ベンフラカルブ (平成27年7月8日)	アドバンテージ粒剤、アドバンテージS粒剤、 ジャッジ箱粒剤、オンコルOK粒剤、オンコルスタークル粒剤、 オンコルマイクロカプセル、オンコル粒剤1、 ホームガーデン粒剤、オンコル粒剤5、 オンダイアエース粒剤、ガーデンホスピタル粒剤、 グランドオンコル粒剤、ガゼット粒剤	適用作物削除

2 今回の制度の導入により使用基準の変更があった農薬

※ラベルどおり使用していただければ問題ありません。

有効成分 (変更年月日)	主な商品名	変更内容※
ジメトエート (平成27年2月4日)	ジメトエート乳剤、ジメトエート粒剤 ベジホン乳剤	適用作物削除
フルバリネット (平成27年2月18日)	マブリック水和剤20、マブリックEW マブリックジェット	適用作物削除 使用時期変更
フェナリモル (平成27年2月18日)	ルビゲン水和剤、スペックス水和剤	適用作物削除

有効成分 (変更年月日)	主な商品名	変更内容※
NAC (平成27年2月18日)	マイクロデナポン水和剤85 デナポン水和剤50	適用作物削除
シハロトリン (平成27年10月14日)	サイハロン水和剤、サイハロン乳剤、 ビリーブ水和剤	適用作物削除
メタフルミゾン (平成27年11月25日)	アクセルフロアブル	使用時期変更
ピリダベン (平成28年10月19日)	サンマイトフロアブル、サンマイト水和剤	適用作物削除 使用時期変更 使用回数変更
イプロジオン (平成28年4月20日)	ロブラール水和剤、ロブラール500アクア	適用作物削除 希釈倍数変更
ジラム (平成28年4月27日)	コニファー水和剤	適用作物削除
チオジカルブ (平成28年11月2日)	ラービンフロアブル、ラービン水和剤75	適用作物削除 使用時期変更 使用回数変更
クロルフェナピル (平成28年11月30日)	コテツフロアブル	適用作物削除 使用時期変更
トルフェンピラド (平成29年10月25日)	ハチハチ乳剤、ハチハチフロアブル、 アクセルキングフロアブル	適用作物削除 使用時期変更 使用回数変更
フェンピロキシメート (平成30年2月28日)	ダニトロンフロアブル	使用時期変更

※ 変更の詳細については下記の農薬工業会のサイトにて確認することができます。
(要登録)

また、上記の有効成分の農薬を使用されている方は使用方法をご確認の上、使用していただきますようお願いいたします。

○参 考

厚生労働省(急性参照用量(ARfD))を考慮した食品中の残留農薬基準の設定について)

<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11121000-Iyakushokuhinkyoku-Soumuka/0000040984.pdf> (外部リンク)

<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11121000-Iyakushokuhinkyoku-Soumuka/0000040985.pdf> (外部リンク)

[農林水産省農薬コーナー\(農薬に関する施策関係\)](#) (外部リンク)

[独立行政法人農林水産消費安全技術センター\(農薬登録情報の検索\)](#) (外部リンク)

[農薬工業会\(使用制限にかかわる登録変更\)](#) (外部リンク)

詳しくは、京都府農林水産部農産課「食の安心・安全きょうと」のウェブサイト
農薬の変更登録情報(ARfD関連)

(<https://www.pref.kyoto.jp/nosan/news/tankibakurohyoka.html>)


をご参照願います。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」
をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

※病害虫防除については、病害虫防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

農業改良普及センター 電話番号一覧		
・京都乙訓	農業改良普及センター	075-315-2906
・山城北	農業改良普及センター	0774-62-8686
・山城南	農業改良普及センター	0774-72-0237
・南丹	農業改良普及センター	0771-62-0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773-42-2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773-22-4901
・丹後	農業改良普及センター	0772-62-4308

農作物病害虫情報サービス	QRコード
<p>・ホームページアドレス http://www.pref.kyoto.jp/byogai/</p>	
<p>※「QRコード」は株式会社デンソーウェブの登録商標です。</p>	

京都府病害虫防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9
TEL 0771-23-9512
FAX 0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－